梅室家集

へ 5
2186
1

門 へ 利 5
號 2186

自撰　林曹校

梅室家集　全二冊

京都書林　懐玉書樓

明治四十年四月二十七日
藤野藏

早稲田大學圖書

序

世に故老ありけり以へらく毎睦
老たるものゝ起居の所謂もに
能ふるありて伯樂ありてのち
そし梅室が健なるをさる遠の
吟をおもふにつけ聴ほどありて

柳堂

喫茶人言山にあるかたきを
玄茶来哦々として素に茶
ありなし喫の玄流水にあるは
かまかに云茶来洋々として
仕河茶志ならしと喫の言塵
羅茶象にあよりしと以へ取老

こもかくつゝしまつ時惑ふこと
なかし志の造とも茶世中醒
米志るかまかと起出て執ま要を
桃柳贊まさ撰僧ぬ聴明
をを先にかまか出て喫茶口に
守むまなをも出来すす此集

頃者通る稱らんと云爾

桑門　露石

松好書

松軒

例言

一此筆は此集を編まるとありて候は
其折とも考へもら候に一けの愛の
こめ小紙にかゝてもすやうぬこい
その後阿の御作もされ侍りやすく
其御一集へ付そひて也の作の御
思ひとも折ふしそ付ても古きも
はかりはしらぬ　まゐらせ

一 長短大小の集あまた昔よりありて
詠の句をえらびきたらぬ人も多く
誹諧をしりて詠むる事も初心の
者のしるべなりとて其の集を見るべき
事なり其の誹諧をしる事なし

一 俳諧の句あり又拾遺集のうちに
連歌のおもむきあり撰集を考へと
いふべき事なり近年俳諧の

ちかごろはかの上にも付の心をとらへ
小柄なる句をも好みとりて発句を
さまざまにされならひて詠むる事は式ふ
無きによりて道の宗匠の教へを但しこの
子の俳学の風体にも俳仙にも知らず
けれども何の集も有りとて有るべし
ある本式人論じて其の撰集を編
なりとかや千代の集の中に論せき

よくよく見てよろしきを先人の
徳をとらん
一 此書自他の懐ハいふまでもなくこの
ほか様々のことをふるまひて見る人もなく
かれもこれも有りしと思ひまし
その始めとするところかならず縁と
なるはここにきはまりぬ 是を絵
あらはし見せてかならずおしえん

人悪いふのおそるあまりをもてとどめよ

于時十安年 撰乃 林其誌

梅室家の集に
　歳旦之詞
元日や鬼ひしぐ手も弦の上
元日や二日ハなれと思ハなし
元日まかくて二日の往きなる
宗祇ハ大晦日より也て
歌よみて済すきの今様にて
足すまさるゝ

宗猶小田圖書
藤野漛氏遺愛之記

はつ山の松えしやそらあをく
はさらやくこことつゞく朱筆
御禄の書物見へ分かみる氣
　　御館もつる
御とりやさえ見え能ゐ松あそく
見ところ見れことはりあみうす
　　えらいりあけくもとゆる
　下　御ゆ人をまれなり

　　きれい絹のあやむ宮ず
ありかへるおろそくなをえ丸の錦
　　蓬萊　何船
おくらやおいふ獅子の糸
　　新玉を祝して
蓬莱の山をあかへし枝きれ
むかへの海を見えす松あまみ
吉原も女おいもふりはなを

居藤　大悟　雅考

佐保姫の様乃いろ〻居藤がな
拾まつくそそても一日包ひかな
たちて跡ふとく思ふもひとなれ
笑ふ流く葉のほころも雑草哉

稲葉子

稲妻子くさ〻いかてぬ敷き哉し

菊名

はんさいや松の古木ハ色や紀

京町上ん

るゑの神もほころれ戸口なれ
菊月や体〻かさしの花屋る

そと〻守

ゑ人の寺ると並和ゐかわ

人日　小松庵

人の日と思へハをしれるゝ共
子うあそひハ行きき小松も
ふりにし昔をきゝぬや小松引
正月の七日たゝなわ中重にはや

わか菜

若菜をこゝろへしかのかた
わかきかれ的つきや芹はねる
やよひ春る薺とちやん縄をかれ

定斗ちらく信やわらかに唐
つむ行も心をあてこゝろれ哉
昭和あそて鶯も摘みにかれ

絵かゝれく

芹薺るかゝるゝるゝ
是なとハ語てし其らわの生
七草の名まえてはこゝれ
ろて亀て摘しゝやや草の夢

実羽　紙考

人の秋れおゐ羽ふくれても給ふ
　うらやましき哉むくく
羽ふつくや住にはやすことと思ふさらう
落葉まや月をうつしておもらす風の音
かくあるゆゑうしや物しくも哉きけれ
うるはしくとも哉ゝつれかりて哉ける

梅

梅さくや拾ゝ人山へかけのなる
初更ゝ田きて四隅もなくてあれ花
住みよの末ちまた近くわ梅の彩
梅の月七ゝ山見えまいなく出て幾

加笑

ゑ代まその枝まて梅まちを枝乱

且條

ちる梅よいさみのたまれも洞ゝ秋

人音きさてるや山寺の梅の月

此ころや鈴ゑ京夕暮かの花

梅かゝ一人ゑせ住しほし哉

ら里や垣乃えしらぬうたのかむ

ちらしりや錦みる中れ梅のゝ哉

花まくら梅ちる清あき花京うれ

きゝられて七嵯峨もやの梅花

垣連寸梅のさ花つきかのをひ

日ハ紐く梅ほろくとむやれかな

多気文

飯崇て梅さゝゆまぬ庵の皮

くせふしく素あてもふれや綿彩筆

いろの玉尾山むりて戸まて

山寺乳庵さひく梅のゑむ山られ

納のむ手やられちとれぬ刃梅折

扇鈴さいさみて折や女妾の花

文書に付す

まさみちて待まちとりし梅の歌

里も花ゆるしきれ山の梅なし

奈良の都も七重か九重に梅の中

柳

霞緑をれよさに又見る柳かれ

人吹きうなんゐく我か家

旅人と鴫のこゑを見ぬくぬるやまなれ

宇治まて

柳この緑もし娘の中に柳

ひかして柳の昔の色を見せる

宋学か矢

柳の家まとおろぞよすえる梅の雨

うきよる梅すれくの柳なる

柳かんさ行きて尾の宿をもとめり

菖蒲

柳かて思ひ切りけり酒乃債

舟実

わら屋の子まさとかりし柳かな

見解もう伺し柳も見えずもなし

ふる雪や路ばかりしの柳かな

流花え

勝ちのくらい膝を見る柳かな

三本残生て未来えへ本くれ柳哉

見おろさし柳見えば江ゝうち

行やまこの世人さく紅角をまね

鉄子

残ね生へ神さも老ける柳かな

其る

若も柳そ花とそる鏡ら柳れ

うくひすもはしいて見むやうる鞁

草やこきえ柳はえてたる

山塚千田ちとくて
蛍ての名にかゝしや小杉橋
出ふくれハ蛍かくろ夕へけれ
雲霧の名に住を登なくて
蛍も来てくれ二十五日ゟ
若菜舍翁
こくれ寸の夢のうき紙翁多
蛍や都とゆるへなきぬ色

うらくらすも露く今昔の時行れ
ちく守り八日蛍て未嫁のおく
屋くも夜まて蛍やとて啼く未
蛍ての新たにみても屋なれ
沙飛
蛍のもふこふ流せる柳かな
うくまふすやれの中たる子なり
蛍や家ハなかゝ一ぬなと

行脚の頃

菜の花や耳の穴まで笑ふ風

うくひすや行くよわなくらし

梅

梅も一輪つきあふ山のくらさ

はるに成ぬ梅まで香る

梅かゝに池のうへ風まさりけり

ねあそくおくや何なる香ちる梅

古稀の賀

おさくやこしもれぬ梅枝

名月 独り旅

一夜ゐる宿に客ありまつの月

人をまつしぬく裏の月

人なくて見さるやまつのかて

つれまつやいるや何る月

名月や物ごとあゐのあかき月

瀬田や雨にハよその鐘乃声
見残し鐘くれまさくりある
通る人皆新しうる家々に
昔謡ふて
早乙女の腰ふし仕るや春小雨
新酒汲みあふ宴
一本も御田植るハ
明雅　露秀

山陰の田も鍬さへ稲子のあり
あちらこち盛りハつきぬきざすれ
咲きしのきさびや出来る諸なる寸
田ハ及ひくるに十丈ニ尺五尺
地を横さハ芝にもあらぬ鍬を
早苗とりさへ棟上峰にも見え言
山ハなるかよ處もなる處
一本立のたゝみをいかにさるもの

舟来て人おろす寸のすみれかな

春雲　雉子

流雲や沖島小磯ころ飲の酒

はつ雲や日のくこえらる雉の声

まろふやし芝餅ねの浮らる里

沖浦へまてちへ春雨ふき風

雉子ほうかへてふうる

まなろ夜またて雉子ほの声

春雨　春風

春雨や独ゆなまのぬ春の雨

一日の春雨降小たまる家

ある日や枝の別らる雨の鉢

春風やちされらしれ新

猫の恋

ねこ恋の一春のおもひまま

あはれの内あられやけぬ牡猫哉

なる程つれどんとまうれ猫

白魚　蛤

可嬉の白魚得るハうてなか
ふる色乃盛りを見る花に流波
蛤や口をあくるとハ宗のみ

海苔

心涼くまてはちのまるハかさりかな
はちの色や情子にのうる俵二人

乃ゆの手たれ掃ても称る一ツあれ

廿日　きんちく

恥かしみ子色くゝ又つれも量しら
粉の母ゝ量ほの世て子をもちて
庭ゆらのすまれ持つん乙ほ生るほ
さらみ生てハすみいれ草哉
ほふめふる見たふかと乙投らる
本のたくみうもて陽墨画

てふ梅花のきはなれハ
なき色し
落まつれて深草見え年本
心のハなし そんなりの小手原
わか手れぬくゝ画や一筆
稲保寿の信上てる画て
まその字かむハ余れの字れ
保銀

うく雨に帰て入けり桃字
伯保は志の田れ妻て入るなら
万歳も一枚まゐれ春乃水
たふまゐてめくりや土のあ
あつらく法や深染の私し私
付て奥かる国まつねまえの日
奥の田へまくもて付や山の水
春めく山やあゐゝ見えても時くる

神風とはなきの伊勢千鳥
寄れきて以よ〻のよる花が
ちるなおかりて越つむら姐の人
山吹く霧たてかはらは草の露
化鵞
因嵐やまなきてつける衣かな
鵞
安き雪ら倦し路次の鏡庵

まみされは大やむしくと壽能
福丸茹
かれとはあかりきあみアの郡
みくられと衣因よ紀く福丸
田をきくくまけ人跡も隔りか
るのみ〻なかて通きてつまらぬ
やめいまうんらきぬ姫のしぬ紀
茶弁の裏戸むほえ芳乾らふ

奥山や雪ちりかゝりて来るらる

蛙　蛙　田螺

かはつは蛙なり　白もし河原
に鳴蛙をいふなりてこむ上戸なれ
める蛙の事なれ雨に任れなり
みかはつ座の二季すさみは
此の中の事なれをとて下ぞ
子はおてあまるまたもをらねは

権はかうあらく見つく蛙か鳴
井も桶も蛙を吐りをかもし
此の有ともありでいへは
そのくさ見かれてみかし
鳴たる蛙は蛙をも
すいさて親をとられ蛙なれ
みかの中の結らる　榎田螺歩

草の花

はこえて　あのをひらき　桃の莚
葉の紅やをし松に餘所の猫
なつの宿や行者の桃を果てく
宿信すた路てやまて
葉のむかしを路の餘乃影

桃花　海棠

さし枝のまなきをれす桃の花

上巳

人のそなはれはめてたし桃の花
まあるれもこ桃さくもやれ
古郷よりふとねふかハはそる
なからされハ
みんの男気桃の名そ多
流れれ鋤のまなたむ春風れ

花　さくら

宵をかなしるほとの花の花

松風もたゆみ行く花さかりかな
あし山
花に松ひともとはよしのやま
いつとなく花となりけり峯の雲
矢渓うて
見る人もみらるゝ人や花の中
咲まじる二人もゆかぬ花の月
待花

花と人まちて峰紫法宝
嵐山雅陽
ちと人たのしむとはよきさかりき
東叡山二句
汲あらうして猶きくや花の声
傍人の天福になりて花見かな
杲嗟
折ろくや花の香匂れけり

嵐く渡唐ぞと
花の跡のちりて行春し丸木橋
色かはあつしきとの住まゐ
侍のこゝ家やちゝ見えられ
ね縁きて花れさる手ぬの角
あらぬ竹むしきる風
鶉雲のる総称をいふると
岩して

縦よりん乃鬼小行之る飛
逃るのふさつら月
小きりや仏へる花のこゝる
雲にもすれいの雲あると
かの身をかつきて森あるる
清はの香又
若紅く柳すて空月あし字
おもしろきたゝかや一ち

流るゝ桜に就て
あまる花やさそ入唐たるは
海の国華坊主およハ其の
志かりしも見るにまさりやき
ふと野に田舎の花のはん
いかてか思ひるやと文
何ちるらんて
まれなり後にてかれ花の人気

太きく深くそてくてまで花
春風手中小桜見
桜の落ちの花

たかきほの花のちきみ
ほされとやもよいものかな
七く花人も散らしまて
後の色紅さてもあ咲て

ちりうきのうた
雲をへて乃あれハそハ山さくら
又たなびく 浅き花を 白妙霞の
花かれハ はるのかすみて 詠むるに
是を法の 霞まて 詠むる
又なつとへの雑題
咲くやと空にちらぬを おもふ心で
花とおもふ乃ゆゑ 寛し なれ

箇条の事を然ば
子ども楽して 新園に隠れる
わき詠と定まって 是を深うまて
何さ心すされハ雑で 子を詠むの
題も無しもれ なして 都を多く哉
すゑあて なれもとく しむる情
おのつから 私しく 是詠の実あて
一首で又一首 詠まずなど詠ニ

そのまゝ空しく忘る
いにしへは花をさくらとおもひけれ
は葉桜や杉を植こむら桜
明る朝ハよそへかへさすな桜
人来たハ一ゆるみしてちるさくら

追而

なさけゆるされてわが桜の礼
おなじく人の恋しむさくらかな

須磨寺ハ秀衡の里にあはれさそふ
若木とハ其や桜の木に在けり桜
名しくも末代々に伝へるさくら
生田須磨といへる所ハ当にものの
庵の松ハそのかみの古今やなれや
我が国古木のさとなる謡
須磨の庵乃さくらハ綿代
乃大桜まで京よ生田須磨

ゑかし

雪国まても江戸妻の櫻かれ
らぬてふ信女ハ佛法あれハ
世法あり何れいふかも何か
といつるその寄も行つきそ
俳諧ありまたなれあれハ上手
何かも且何ともハ下手あり
松まみと見え花ハ我のおもひく

作者ともつて花の山めくり

俳歌

柳せ依ハ家をられまて藤原の毛
ら行のまつくれ下の小家くられ
君よされの羽織をきるの名称まて
ゆくまもやいつ船をき浮小田乃

淡雪

夜ごと給

衣くばり　給

たゞいまは御使にて結構なる衣くばり
御念のいりたる事共くれ〴〵忝く
殊にまてあり難く存じまゐらせ候
猶又それおまち申さ給べく候
あらためて御礼　申上まゐらせ候

試よきことにせかれてついとゝる
梅絵と程やすあそせ給
たちわかするうちつきしなら絶
なくはさこ袖の露とるなりせな

秋月　経政

あきにゝなる暮らぬらくかゝ
ふる雪の光もさくみ月られ
されくは梅業経あるうきられ

哉おつゝて
経旅のひさむつひる経れられ
こしうあやまたの夢路ぬ花
みしうに我行きなる流こゝれ
暁れ旅やすり飛のたまゆる

子規

人ゝやつるぬ年なれれて宿
鳴きぬれたく聞えられ時鳥

みそひつきもじをも十文字
　清き空に寄りて
ほとゝぎすや鎌倉山を
なほは山路をきれをも月
鳴とこそ云へる侍りし哉
ほとゝぎすとは遂になりにけり
杜宇のまつかせにふるあめ
ほとゝぎすを待れぬて

鶯のかいこに入てこそは
うぐひすを梅に暁の時鳴
鶯をきゝてなつかしさにおもはず
大江丸てる若葉の花
やうやうに時鳥二声ぞ聞
鳴きけりひるまの雲のまへた
まだなきて汝おもひて
なほ見みるなしやまと御覧ずる

木戸さして境内しんとほとゝきす
ほとゝきす鳴やよふかき茶屋つゝき
志をのりて
おこふし足袋山の宿に野分
螢
螢垣 螢時
ふはりと鳴て浅茅に鳴段哉
来る朝をみて尾ぞ葛の子さそはれ
茅屋

螢とおもふ草葉の光
勝吉
たゝひきて流れ流の螢かれ
月の夜それ宝の窓螢やわらか
宿へ入はつかれ螢をみな
大津東治
夜晴と見えて此螢の紙を見
螢むつれ八螢はあかりかす月くもる

人もなし蝶はすのさかり荷兮
蝿追うて榎の梢みる野水
牡丹　杜若　芥子
若がへるまゝにみぬ牡丹哉　九白
冬ぼたん日暮に落る牡丹哉
朱の鉢に深川よりて牡丹哉
紫の色や雲のゆくへの哉
人よりて來ぬかきつばた
足代のちりはさうりやかきつばた　冨
灯をとりて牡丹ふくし　杜国
取次の花を見ぬてやる　杜国
引き寄せてよしや芥子の花
ゆふ風や床の花しく露の花
見かへて芥子きるやかきはな
花も川にかゝる芥子の一重哉
きしの花る光あはなし　越人

是れあつてちるやはしても一縁
花の夜明くらくしおもふ坊主
麻さくし庭まおもふて西年ふ見
丹家のおてもたれし茶しの光
　かくふ子楓茂
年きれの末孫乃さいるかくふ萩
露をも茂往をまて待やえられ
花も家もへちて枝のかくふかな

見しみかねちやこえまて様衣
おちさ結ま子るふとつて又おもし
子らるふて来つくてそれもうの柳
おあつて横もゆれる茂らぬく
空ちいちえしてれをも売れそれ
風れいか小石こちつて志くまもかな
子れくまて池の小鳴も茂られ
出信松江の送呂

浅る丸れハ涸えまみの茂かな
卯乃花　百合　拝子
みの花や人つきあれて濁れ安
卯のもひを隠て剣の破年
蝶の糸ひくやねちむく花々の色
おほくさまもゆりも眠乃色
敦盛の塚まて
たそしその気ま流きし一のみ

松魚
毒なきに引きけるゆ御わ色
店乃血を見せかすかつをそれ
見おくれいふ余る入ぬわ色色
切ま　子子
堤ま閉之のそむや傍のさ花
かくつわまや葉ま芽の来も見ひ

ゆり入る木よ落つめてかゝりつゝあり
蜘は身かりなるよ浮か明して
このをれまでおはすへい繊
りをおもる兜をまえ　毎とらぬ
おのれて隔おさいふおもる
ゑめのちま史をそるうまるを
みゆる心地さへしぬ

蜘は春子啼せいかりあへる
あふかりも陰さら面れ沼ふ
大蟷の尾すハ伸んてあ
ありとかへる
子身に身のかくへう乗を乱
竹條　蝸　亀
菊の月何気もして　竹條雪
すさ体や子衡のゆゑに　竹條

皆々御世ハ家も寿ゝやか御繁
昌とう時ハちハされハれ
あさけり毎年のすゞりや旅ゟ
兎角　御餅
節季や餅よほとされて兎ちと御
夫とのゝ着も顔もろとも
おんの池のうたく水鏡うれ
雲やけをみて顔もろとも御餅ハ

みそハ流くり様嫁ハ嫁ゝ共
兎角
多年よ所々ゟのやうまゝ
嫁せ来て一月ちうゝやうんて奉
戸たちさせん戸みれみえて多般
棟川一家ハこえすかんてとう
何ほとよみ遅
兎角二千ハ留をみ十日坊

行とせハならぬ夕くれ手まくら
けふまでハ鳴かぬあそこかんこ鳥

移竹

みそさゝいんさるさぬあふ野かな
稲つるひの目くりの湊し蝶くし
移も出ても燃まいそて来て夕来る
萱の葉の火風まよふる野川ぶ

玄鶴 行く子

吉野の奥やさくら一日ぬり

杉橋 了帆子

あら鷹の根にたえてし靴桶
兄さやをて雨の月ぬ見やりて子
りくも鷺うり七夕まねみ

蕉子

松風にはふて吉花見かね
赤きに目得て小吉休みゆく家

第 茶子

いまそそ竹の子は冬さむよりて
竹の月なる母餅や人たりける
かくのあさと成らぬそらそ御茶子
るもきる給うよ若きく茶子られ
て保つの年卯月二十日そ
元母三十七回忌の書を東なれ
いまそ花きそりけ僕人其小僚

をわるもほくのまたと斎して
人くとこ是れ情ひなく給
足はくりぬ
夜子の数ら記すなき帳られ
こ日は深川浄心寺ゆき
おりて寺看乃清すゝきむく
みなけ子孔角もいよ母乃
御名ある我ゝ文りは嘆いして

竹のはやしにのこる雪の聲

又

冬こもり間もなく乃記念そく
おもへば神も古き名なるか

青梅　霞翁子

夜のあはれは花におもふ苔の梅
青梅は旅の志むかし娘の夢

青梅やおふと見へたる其の枝に
いとけなき子を見ゆ人も修
其の花の色とこそいちこ見

田植　子雀

見えそ旧手流すやうなき田植かな
流れて持ちぬける田の見え見
立てなる苗やおもへのたまるせ
植る日は畦にひる子雀うる

このゝ我経にらけてさなく敷

菖蒲　紫陽花

葺てはらつくしひや菖蒲売

菖もて刈るとすかしやあやめ草

旅人の笠さやとるやあやめ売

甲斐の湯に我ゆむ紫陽花

五月雨は

あやめ咲るはしたるれ人淵の水

紫陽花の志つくや地をも花の色

粽　蟻

粽やをえりみえ露笑ふ花

秋ちろ加ちまきれとゆふ粽

海葉もや笠をまへて結ふ粽

浜やえれ翔ことろ花の我嫁

五月雨

雲雀も紫利　村の五月雨

桟や露ちるゆるむ雲月夜
蝶觜しくるの五月雨
さみたれの黒め白らや花作
雨の日はくされ字ふれてくる
おそくて
雨きくれ旅ハおもしろき晴る
ほころれは仏のたちを志るへかな
寂の身をたつさえて秋しかくる

帰るおのたつも露や五月雨
昔のむ
とくれはかまて
雨りの果やころくと芸のきれ

諸北枝先生墓　享保三戊戌年五月十二日終焉
右ハ古墓の銘なりかおかし妙
卯辰山浄土宗心蓮社境内にあり

天保元年との春集む梅田平風
俳とくして古紙築きえと積
て一丈餘の築を成したるは
洞前一對を立て傍に新碑を
建銘を平工需む

銘曰
静枝先生ハ少年の建主なりと
聞侍るもへ見侍ることを也む

見てハ居をくむものゝ由聞
なりはすも及へ其後の勝性
をなるへそはいかし其風を以
古墳を修飾しく又跡成
解き大に世に之れを記
ると以て人心これを守る
かくもて天人をしてそれ
しむるものなるへしと銘て

春あらし後之

讃

千代をふる砂に咲けり松の花
　竹あさく木積吹きて
せんたんの花はまづや笠のうち
　詠者
水田子人を蒸す花くもる
　扇子　團扇

ひめよ扇子をしれて何つもとあ
隠るのは以くかえる扇子かな
　満ちちそて
筆の紀をたつきまでせて清き縁の
扇子宮よふみんてつかや花川戸
扇さくまや蝶のかゝうらそうかれ
後とらの小峯秋家て團扇多子
　画

わくらはに見えし雲は忘れつつ
たちまちに桁をとめく法華の社
咲つりきてや寄る葉のわたる草
花を手にまたきこえて川辺
咲落て匂ひを法華の花のおれ
りきられいふ堂かけし飛ほとる
ふかきうれひてあかきわか花
かうらむとはいさはゆく葉にふ

蛍

柏の木やあれなうはし蛍の飛
うの花の白きにまじりて咲せける
こよひをみれともちるきもしやたき火哉

橘之の葉中て

蛍よりもなひかしく時るよるさの杜

おもほえたるおもし蛍なく見しうら

順游陪まの家

そゝろしや螢さく秋を待まちて
　　　之至作
雪に子おかり時ふよことし作
わか作ふみわりしなを伝わるを
　　ひろら　　文臣
露ふかやけふのやゝな松の露
此よ色いまとも在可ね時雨
　　蓮

華の香やたゞしらしと宴延
　　夏の月　雲外峯
つゝく是我田のくまえの月
夏のくさ若れ色をまたきみ
吹さやく芦荻松して聲のゝる
夕焼かゝ月おまたなかねむ峰
雲の峰抜はつ川上寺　汐留川
淀船も膝柱にくきのこね

麦秋　麻州

麦秋やそよふくかぜの山畠
麻州ハつれ〳〵おきる茎もなし

氷室　夏の雲

耳くるも素にそよく氷室かな
さくらのけしきいつもかわらぬ夏氷
秋の系名だ溜りたる
河鶴のさくはくもく夏の雲

帷子　千年

かたびらの衣へゆくなつぬぎかな
ほうちや世の中かりも雨ふり

清水

誰ぶら清水くみて里の蛙
汲みて清水ハ又ぬるむ一杯
峯の鶴祐にたくぬ清水哉
落のあふて清水のよれるのと

暑

はつきりや立出法もうしの木
暑けれバくもちはしの足ほとおれ
麦粉の人手作つくはつき多

涼

涼風に身を打あてゝ出る川に
中の細葉に涼しさ打拾ふ
不やみを柳にそよぐすゞみ哉

稲の末乃稲もすゝしきのと
暑さ凌しゆのそよぎて細涼にうまれ
家業のひまある人ハ高殿に
風雅のためにハ秋月をまつ
風雅のもてあそびかつむハる
家業の暇をえてすゝみあり
とある人ゟあかして
暮あけて月待て行先涼し

那由にて辰を移て
柳原ちりと以先さし
折れ　風葉
これのやなぎし葉ゝ桜の下
文字を多れ惜や風に寄る
かゝ
春雑を続　書まかくて雑じ寄
降我　芳の姫

風にそよぐめ多き手を抜れ
冬毎のむらくまりけ秋らふ
えんれきさんそくは芳の勝る